

進みテント設営予定地点に到着したのは昼前であった。しかし、この水は干上っていたので水のある約1キロ上流にベース・キャンプを設営する。このテント場は水には困らぬがアブの多いことといったらゴミ捨て場のハエの如く、挙句のはてには10分間に200匹のアブを殺したと自慢する隊員が出てくる始末である。このような状態では、休息日といえども、まともに身体を休める場所がない。洞窟周辺の残雪や洞内雪渓では身を凍らし、テント場では、太陽の下で水浴びをする。体温調整も大きな課題である。以上苦労話しを中心に述べたが、洞内アタックのことに関しては他氏に譲ることにする。最後に私自身3度の青海小穴調査に参加して、探検活動に於いて「人間の和」程重要なものはないということを痛感した。この「人間の和」こそが、どのような悪条件のもとであれ、自然に挑戦し得る最大の武器ではないだろうか。

第2次・第3次青海小穴調査

——そのリーダー記——

三 戸 忠 弘

行動した後でその事前のことを考え、思い起す事はほんとに容易である。現役が、最大の難事として、行為し、挑戦してやっとの思いで征服したことを、それが当然の事のように気軽に、平然と越えていく姿は、たのもしくもあり自分にとってはチョッピリ、淋しい事でもある。第1～第3次の青海千里洞の探検も、漠然とした偵察を頼りに、千里



第3次青海小穴調査隊員（洞口にて）

洞の実態を、手探りで、浮び上がらせてきた。私達が現役として活躍出来た第1～第3次迄の探検ではとうとう千里洞の核心を捉える事は出来なかった。しかし、私達が残した千里洞に関する

経験は第4次～第5次の探検に大きな手助けとなったと思っている。私がリーダーとして担当した第2次・第3次青海小穴探検での最大の関心いや難事はただ1ヶ所の征服、突破にあった。それは、疑いもなく、垂直70mの「孤独の滝」の征服である。私は第1～第5次迄、全ての千里洞探検に参加したか思い出すのは、この「滝」の記憶がなままと新鮮であった。それは私がパーティーのリーダーとして、第一線で活躍出来た頃の記憶である。これ程苦しんで、成功した洞窟探検はなかった。第1次探検で私達は千里洞の規模の大きさに圧倒され、洞内雪溪の存在という考えもしなかった事実を知り、洞窟探検技術の未熟さを知り、極端な装備の不足を実感した。この様な状態の中で第Ⅱホールまで到達出来た事は第2次以後の探検に大きな自信を持ったのである。しかし、この探検も第Ⅱホールの最深部で、その進撃を完全に阻止された。第Ⅰホールの巨大な雪溪より流れ出ている洞内水流が第Ⅱホールの深部より滝となって闇に消えていた。洞内温度2.5℃水温2.5℃入洞以来数時間で身体は冷え切ってしまうし、洞内水に濡れる手足の感覚は完全に麻痺してしまう。この手足の感覚の麻痺が第2次第3次探検の決定的な障害となった。私達は阻止された障害の実態を少しでも的確に把握しようと努力したが推測の域を脱し得なかった。他のルートは全くない。石等を投下して第1の衝撃音を聞いて空間落下約4～5秒で第2の衝撃音を聞き、すぐに第3の衝撃音を聞いた。私達の過去よりの経験からすると、第Ⅱホールから第Ⅲホールもしくは大テラスまで約80mという結果となって計算された。この間、途中1ヶ所又は2ヶ所のテラスが有り、他は垂直もしくはオーバーハング状の岩だという測定となった。第1次探検はこの時点で中止された。なぜなら、私達の用意したワイヤ梯子は60m、クレモナ梯子は第Ⅰホールの深部より第Ⅱホールに通じる「滝」に取付けていた。残り梯子は0m、ザイルも12mm 40m1本を残すのみであった。

間もなく、第2次千里洞調査計画が出された。第2次は3大学合同パーティーの形となった。大阪大学、大阪市立大学、関西大学、この3大学の探検部の合同パーティーを組んだ。というのは私達はあと100mにも及ぶワイヤ梯子を独力で作り得なかったし、メンバーの不足も気になっていた。3大学で装備、人員を分担し、より充実した形で第2次探検が始められた。期間は約1週間実行動3～4日の日数しか取れなかった。この時私はリーダーをしたのだが、大きな誤算がある事に気が付かなかった。事前に3大学合同のトレーニングをしておくべきだったし、メンバーの性質を把握しておく必要があったのだが、決定から実行動迄の日数がなく、それも行っていなかった。この為他2大学のメンバーの各個人の技術が全く解っていなかった。その上、他大学の立場を考え、私の思い通りのアタックメンバーが組めなかった。というのは洞窟の探検、特に堅穴の場合、アタックに参加出来る人員はほんの少数に限られる。他は洞口よりアタック地

点まで、連絡、ザイル確保、装備運搬等の陰の力になってもらわなくてはアタックの成功はない。入洞したからには隊員全員がアタックに加わりたいと願うのは当然である。アタックメンバーの選出はリーダーにとって全く頭の痛い問題である。私は3大学の立場を考慮に入れ、阪大2名、市大2名、関大3名計7名でアタック隊員を構成した。第Ⅱホール末端には適当なフィックス地点が見付からず、ジッヘルワイヤ 20mでフィックスした。この梯子は滝の流れの真中に位置していたが、他にはフィックスの地点も見当がつかず、流水を真正面からかぶる位置でアタックを開始した。梯子接続60m。先ず試降がはじめられた。15m下降第1テラスに到達、広さ1.5m×2m、人二人が立ってられる面積である。しかしこのテラスは滝の落水を全然よける場所もなく、ヘルメットの上より激しい流水を全身にかぶる事になる。この地点より対壁迄約15～20m、ヘッドランプでは明確に認める事は出来ない。この地点まで下降すると全身衣類の乾いている部分は全くなく、冷水が骨の髄まで濡してしまう。手足の感覚の麻痺も著しく、ワイヤ梯子を握っているのが解らなくなる。第1回目この地点で引揚げ、上がって来た隊員は震えが止まらず、早急に洞口まで引揚げねばならぬ。第2回目、この地点よりさらに15m下降。隊員より引上げろというサイン。ザイル確保地点では3人がザイルを引上げる。上がって来た隊員は、顔面は蒼白、歯をガチガチ震わせ、ぐったり疲労している。休息させなければ洞口までの梯子をとうてい登れない程だ。「まるで大城壁に蜘蛛がへばり付いている様だ。」と言った。試降第3回目私が最も信頼しているK君を試降させた。下降55m、ワイヤ梯子が下に届いていないと報告があった。しかし、彼は下方に白く光っているテラスらしき場所を確認した。その距離垂直15m～20m。またしても装備不足で敗退せねばならぬ。これ以後、この滝を「孤独の滝」と命名した。この「孤独の滝」の突破以外には千里洞の探検は成功しない。もはや執念になった。第3次計画まで8ヶ月、今度は関大独自でやろうと決心した。全員トレーニングをつみ、装備も考えられる全部を用意し、ワイヤ梯子も独自で160mを確保。メンバーの節約の為洞内連絡をトランシーバー交信に切り替えた。流水対策も、アクアラングに使用のウェットスーツを用意した。メンバー全員今度こそその意気に燃えた。第3次が実行された今回も私がリーダーをする事になった。私にとって現役最後のチャンスであった。今度はメンバーの力量、技術の把握は充分である。梯子も万全を期した。入洞すると、吸い込まれる様に第Ⅱホール末端「孤独の滝」へ何も考えずに直行する。アタックメンバーも最強で不安はなかった。下深部の意志が的確に伝わる様に、第1テラスに中継員を配置した。第1回試降、私はこの第1試降に他のどの隊員も行かせる気にはならなかった。第2次の苦勞を身にしみて知っているからだ。リーダーである私がやるのが最も気が楽だった。ザイルを腰に付け、本当に決死の覚悟だった。30mを過ぎ、全身水にぬれ、手足

が麻痺し、上からの流水で呼吸が乱れる。上を見ても、下を見ても、ワイヤ梯子が大きな空間の闇の中に一条の光となって消えている。一番苦しい時間だ。55mを過ぎる。下方に白く光っているテラスを確認、さらに下降。完全にワイヤ梯子はそのテラスの上まで到達している。心の中で「やったやった」と叫んだ。テラス到達でテラスの丁度下方10m位で第Ⅲホールだ。全く大きいホールだ寒さと興奮で身体が震えが止まらない。誰も足を踏入れた事のない第Ⅲホールに立った。ホール一面モヤが霧の様にかすんでいた。そのもやの中に、ワイヤ梯子が頭上垂直に闇の中に消えていた。

第4次青海千里洞調査

——探検の真の目的——

水 島 淳

なぜ危険を冒してまで青海千里洞を調査せねばならないのか。第4次調査を目前にして、ふと私の頭をかすめた質問だった。なぜだろう。はたして、『そこに山があるから』というあの言を発した当時の岳人の心境の故なのだろうか。否。たとえそこに青海千里洞があり、それが未踏であろうと日本最深の洞窟であろうと、私にはそれを踏査する気持ちなどさらさらしない。私を引きつけた魅力は唯一つ、数名の学生が一つの目的に対し、力を合わせてそれを乗そうとしているということだった。大学4年間を通じて同学年同学部にありながら、話もせずに卒業する人々の中で、利害関係を持たない数名の部員が、上下学年一体となって一つの目的にぶち当たるその姿こそ、我々の乗りかけていた船の真の姿なのではないだろうか。青海千里洞は単なる舞台であり、我々に教えてくれるものは、自然の驚異でもなければ死の宣告を破棄する方法でもない。唯一つ、それは、一つの目的に対し数名の隊員が各々異った考え、性格、感情を寄せ集めて、どの様に協調し合い、どの様にそれを発揮したらよいかを教えてくれるものだった。

過去3回の調査で3点が問題とされた。第1に梯子不足である。前回不足分と予想堅穴継続分の合計100mを新に作製せねばならない。このために、出発当日まで梯子改良、作製に当った。第2の問題点は洞内キャンプの対策だった。洞窟調査の難度が高いため、少なくとも洞内で2泊はせねばならない。これに対処するため、過去2回の訓練を再検討した。第3に洞内流水である。洞内流水は直接アタックの成否を左右するどころか、人命をも危機に落とし入れる。これを打破す